「ロシア文化入門」・「ロシア地域研究入門」合同

神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会東京復活大聖堂）見学会

日時：4 **月** 25 **日** 15:30　**集合場所：大聖堂事務所前**

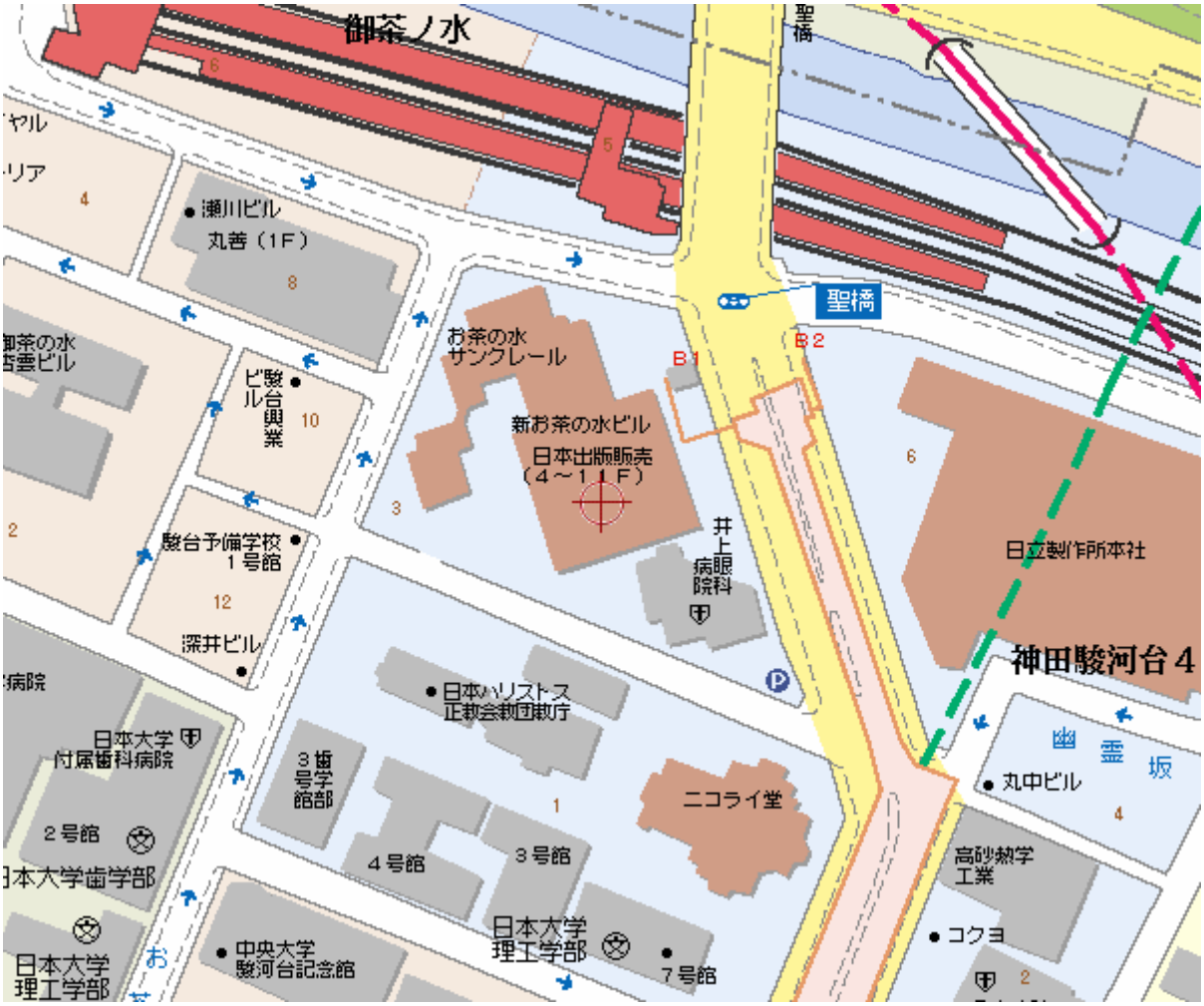
上智大学からの行き方

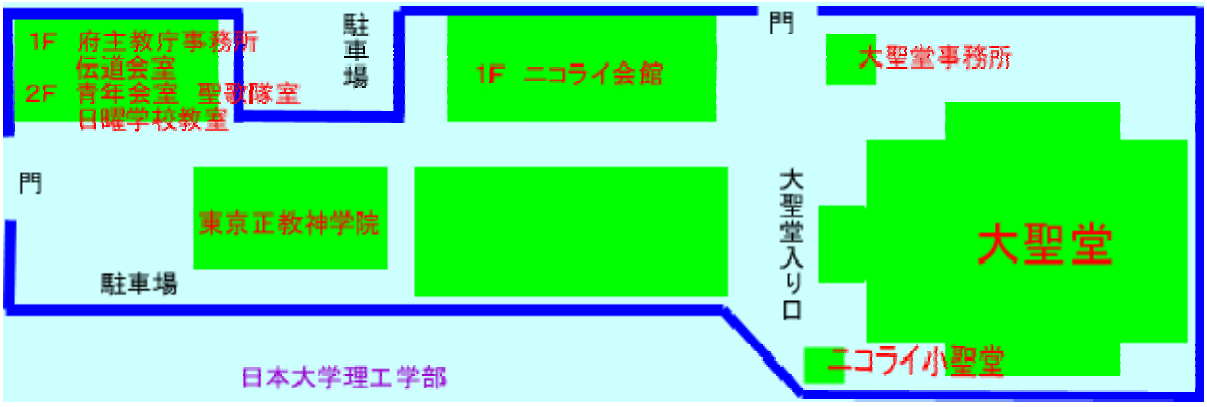
JR **中央線快速電車（赤い電車）東京行きに乗り、御茶ノ水駅下車。聖橋（ひじりばし）口改札口から徒歩** 5 **分。聖橋口はホーム中央付近の階段を上がります。**

9/10 **限（**17:00-**）の授業に間に合うよう** 16:30 **ころ現地解散します。**

日本ハリストス正教会ホームページ http://www2.gol.com/users/ocj/

東京復活大聖堂教会青年会ホームページ http://www.geocities.jp/ynicojp2/





資料Ⅰ　宣教師ニコライ（ニコライ大主教）の活動：日露文化交流の一側面

参考文献：中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波新書、1996 年

１．宣教師ニコライの日記の発見

宣教師ニコライ（ニコライ大主教、1836 年 8 月～1912 年 2 月）＝幕末・明治期の日露文化交流の最大の功労者
しかし、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた
1912 年（明治 45 年）2 月のニコライの死後、ニコライの書き残した日記その他の文献資料は関東大震災（1923 年）で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）の創建者である宣教師ニコライ（ニコライ大主教）は、名は知られながら知られざる人物であった。
1979 年、中村健之介･東大教授、ニコライの日記がレニングラード（現サンクト・ペテルブルグ）の古文書館に保管されていることを確認。

２．函館のロシア領事館の設置と宣教師ニコライの来日

（1）宣教師ニコライの生い立ち

1836 年 8 月 1 日（新暦 13 日）、イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン（宣教師ニコライの俗名）、スモレンスク県ベーリ郡ベリョーザ村の教会の補祭の子として生まれる。郡教会付属初等学校、郡神学校、ペテルブルグ神学大学を卒業し、「ゴロヴニンの手記（『日本幽囚記』）によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭として来日。

（2）宣教師ニコライ来日までの経緯

1855 年 2 月 7 日	日露通好条約（下田条約）調印
1858 年 10 月 24 日	プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチ、函館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー・マーホフが領事館付き長司祭として着任。しかし、マーホフは着任時すでに 60 歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院（国教ロシア正教の監督官庁）に後任の派遣を要請（日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求めた）
1860 年 6 月 23 日	24 歳のイワン・カサートキン、修道僧となりニコライという聖名を受ける
30 日	ニコライ、司祭に叙聖
8 月 1 日	ニコライ、日本へ向け出発（シベリアを馬・船で横断）
9 月下旬	ニコライ、ニコラエフスクに到着し、当地で越冬中のアラスカで宣教の経験を持つのちのモスクワ府主教イノケンティと出会い、聖書と祈祷書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる
1861 年 7 月 14 日	ニコライ、ロシア軍艦アムール号で函館に到着、領事館に着任

３．宣教師ニコライの活動

（1）宣教師ニコライ、日本を学ぶ

?～1864 年	ニコライ、西蝦夷警備のため派遣された秋田久保山藩兵とともに函館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎に学ぶ
1864 年 4 月	ニコライ、航海術を学ぶため函館に来た新島襄（当時 22 歳、のちの同志社創設者）に学ぶ
1865 年	新島の脱国・渡米を助けた攘夷派宮司の澤辺琢磨、最初の日本人正教徒となる
1869（明治 2）年初め	ニコライ、日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン（下田条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861 年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任）、これを支援
6 月 20～27 日	函館五稜郭戦争
1871 年 3 月初め	ニコライ、再び函館へ

（2）宣教師ニコライの布教活動

1872（明治 5）年 1 月　ニコライ、上京し布教活動開始
明治期の日本ハリストス正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも 4 ない

し 5 人（明治 10 年、在日外国人宣教師は、カトリック 45 名、プロテスタント各派 99 名）
→正教会は日本人伝教者による伝道が中心

1879（明治 12）年春　ニコライ、大聖堂建設資金募金のため一時帰国。プチャーチン、これを支援
1884（明治 17）年　プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987 年帰国）
1891（明治 34）年 3 月　東京ハリストス復活大聖堂（ニコライ堂）落成
1904（明治 34）年 2 月 8 日　日本陸軍、朝鮮の仁川に上陸
9 日　日本海軍、旅順港のロシア軍艦 2 隻を撃沈
10 日　日本、ロシアに宣戦布告
ニコライの主教教書「神に祈りてなんじらの皇軍に勝利を賜わんことを求めよ」
ロシア駐日公使ローゼン、公使館全員の退去を決定。ニコライにも帰国を促すが、ニコライはとどまることを決意
ロシア正教会信徒をロシアのスパイ（露探）呼ばわりする風潮蔓延
ニコライ、ロシアの敗北に恥辱を感ずる（愛国心の高揚）
1905 年　捕虜収容所での日露交流、兵士に対するニコライらによる慰問と教育
1912（明治 45）年 2 月　ニコライ、東京で没する（75 歳）。「遺業は、大聖堂 1、聖堂 8、会堂 175、教会 276、主教 1、司祭 34、補祭 8、伝教者 115、信徒総数 34,111 であった」

資料Ⅱ　ニコライ堂（東京ハリストス復活大聖堂）

竣工	1891 年(明治 24 年)2 月
所在地	東京都千代田区神田駿河台 4-1-3
設計	ミハイル・シチュールポフ、ジョサイア・コンドル(Josiah Conder)、岡田信一郎
施工	長郷泰輔
構造	煉瓦・石造 1 階建て、塔屋付、銅板葺

正式名称は、「日本ハリストス正教会復活大聖堂」。通称の「ニコライ堂」は、日本ハリストス正教会を樹立したニコライ大主教の名に由来する。ロシア人建築家シチュールポフの設計図面をもとに、 コンドルが実施設計・監督を行った。工事は、1884 年（明治 17 年）に着工され、1891 年（明治 24 年）2 月に完成。建設地の駿河台は東京市中を見下ろす高台で、大聖堂は東京の大部分の場所から眺められ、 東京のランドマークとなった。1923 年（大正 12 年）の関東大震災により、大聖堂の鐘楼やドーム屋根が崩壊し、内部も焼失した。大聖堂の修復工事の設計は岡田信一郎が担当し、1927 年（昭和 2 年）に工事が開始され、1929 年（昭和 4 年）に完成した。その後、1992 年に再修復開始。屋根と鐘楼の外観は、創建当初の姿とは異なるという。

資料作成：上野俊彦